

都市民俗生活誌の可能性

内田忠賢

The Proposal of Folk-Lifography on Urban Society

はじめに

- ① 都市民俗生活誌
- ② 民俗学にとって都市とは
- ③ 都市民俗生活誌の可能性
- ④ 問題点と課題

【論文要旨】

村落の民俗誌について、膨大な数の報告があり、多くの議論がなされてきた。しかし、都市の民俗誌については、課題が多い。民俗学における都市の定義さえ不明なままである。また、都市民俗では、現代的側面、動態的側面を無視できない。従来の民俗的な調査では十分対応できない。その意味でも、これまでの民俗誌とは異なる視点から対応する必要がある。新たに調査項目を設定する前に、都市生活をまるごと描いた作品（モノグラフ）を確認、検討する必要がある。小論では、これらの資料群を「都市民俗生活誌」と呼ぶ。都市民俗生活誌は全国各地で編まれ、発行されているものの、その全体像は不明である。そこで、全国規模で都市民俗生活誌資料の確認と収集、検討を始めた。この作業のプロセス、およびフィールドワークの中で、都市や都市性を再考する必要があると感じた。そこで、民俗学にとっての都市や都市性について再確認をする。そして、都市民俗生活誌のセールスポイントについての私見を述べる。小

論では、都市生活の具体相を眺めながら、都市人の様々な心性を探る試みの前提を論じた。

はじめに

村落の民俗誌について、従来、膨大な数の報告があり、多くの議論がなされてきた。しかし、都市の民俗誌については、依然として、課題が多い。都市の定義さえ、あいまいなままだと考えられる^①。また、都市民俗では、現代的側面、動態的側面を無視できない。しばしば指摘されるように、従来の民俗的な項目調査では対応できない。その意味でも、これまでの民俗誌とは異なる視点から対応する必要がある。新たに調査項目を設定する前に、都市生活をまるごと描いた作品(モノグラフ)の存在を確認し、その内容を検討する必要がある。このような資料群は、現代的、動態的な内容から考えると、むしろ生活誌と呼ぶほうが相応しいかもしれない。本報告では、それらに、とりあえず「都市民俗生活誌」という名称を与えておく。これらの都市民俗生活誌は全国各地で編まれ、発行されているものの、その全体像は不明である。そこで、全国規模で都市民俗生活誌資料の確認と収集、検討を始めた。まずは、数年後の目録作成を目指している。そして、この作業のプロセス、および関連する拙いフィールドワークの中で、都市や都市性を再考する必要がある。小論では、まず資料調査について若干の報告し、次に入手した諸資料やフィールドワークの一端から、都市や都市性について問題提起をする。さらに、都市民俗生活誌の可能性について、具体的な事例をもとに考えてみたい。最後に、都市民俗生活誌調査の問題点と課題を示し、読者の批判を仰ぎたい。

①都市民俗生活誌

都市民俗生活誌という言葉は、造語である。この言葉に、「都市民俗」

の「生活誌(Lifography)」、あるいは、都市の「民俗誌」および「生活誌」という意味を、私は込めて使いたい。前者については、すでに、民俗学者の倉石忠彦と社会学者の有末賢が指摘している^②。都市民俗が都市生活の中に見いだされる伝統的、伝承的な要素であるならば、それらの各要素が有機的に関連した全体像こそ都市生活誌と呼ぶに相応しいという立場である。従来の民俗誌が主として項目主義に基づき、その記述が静態的であったことへの反省から、そこに現代的、動態的な変化をも発見しようとする立場と言えよう。というのは、都市民俗についても、これまで様々に論じられてきたが、生活の中に見いだされる民俗的事象のパーツとして取り出したケースが少なくない。したがって、都市民俗生活誌という言葉をあえて使う場合、都市生活の本質は変化であり、それらを総合的に把握する必要があるという思いを、私は込めている。

一方、私は都市民俗生活誌に後者、つまり都市の「民俗誌」プラス「生活誌」を想定しているが、都市の生活を総合的に把握したいという点では、前者、つまり「都市民俗」の「生活誌」と同じ考えに立つ。都市民俗生活誌は、都市生活を構成する民俗(伝承)的側面の記録(都市民俗誌)および現在(現代)的側面の記録(都市生活誌)の両者を総合した記録だと定義したい。さらに、都市民俗生活誌は、主として生活者の視点から都市生活の実態を生き生きと記述したモノグラフを指す。該当する資料としては、自分史、随筆、市町村史(民俗編、生活編)の一部などが挙げられる。同時に、都市は様々な立場の人々が離合集散する場所であるので、その街を訪ねた旅人、一時的に街に滞在する住人、あるいは異郷人などが残した記録も、都市民俗生活誌の対象として検討する必要がある。特に、都市の日常生活や街の雰囲気記録する作品を想定している。

以上のような前提で、全国に散在する都市民俗生活誌資料を、網羅的に、私は確認しつつある。同じ関心をもつ人々に役立つような、データ

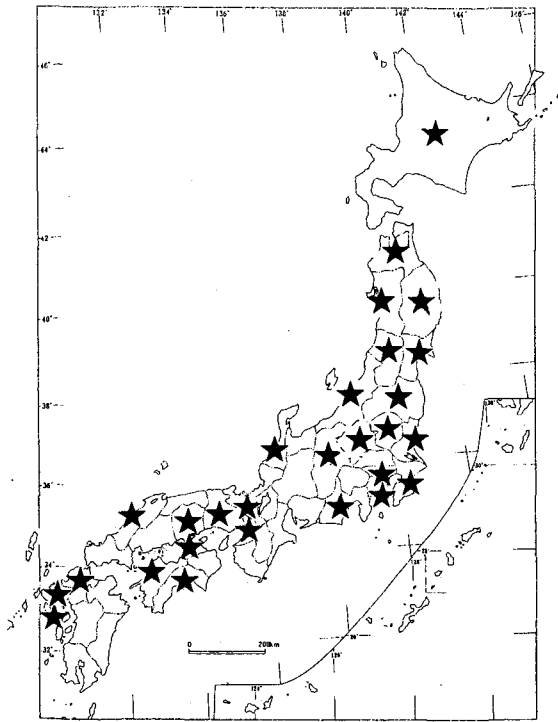


図1 都市民俗生活誌資料の確認をした都道府県

ベース化のための目録作りである。^③ これまで、関連資料の整理は「都市民俗学関係文献目録」(金沢民俗を探る会)で試みられたにすぎず、その目録も断片的なものだった。^④ そこで、網羅的で、できるだけ情報を盛り込んだ目録を作ろうと考えた次第である。たとえば、表1は、山形県内の都市民俗生活誌資料目録の一部である。不十分ながら、これまで二七都道府県の公立図書館を回って確認作業をしてきた(図1)。この作業の中で分かったことのひとつは、市史(民俗編)の記述の多くは、市内の村落地域、あるいは都市化(混住化)した地域における旧住民の民俗であり、従来の(村落)民俗誌と何ら変わりが無いということである。つまり、市史(民俗編)の記録は、〇〇市の生活とは言うものの、意外にも都市民俗のそれではない。これらを、都市民俗生活誌に含めることはできない。むしろ、次々と消えてゆく民俗を記録することは大切であり、市史(民俗編)の貴重な役割のひとつである。その重要性を否定することはできないが、現在の都市生活の記録や生活変化の記録も市史

(民俗編)に含まれて然るべきだと、私は考える。都市的生活様式を中心にした都市生活の記録も、少ないながらも。たとえば、一九九四年に発行された『宮古市史・民俗編』には、ゴミ処理の変化と日常生活の関係を記録し、都市民俗生活誌と呼ぶに相応しい、優れた作品となっている。^⑤ 八〇年代に刊行された、東京都の『品川区史・民俗編』や『新宿区史・民俗編』にも、現代の都市生活を記録しようという意欲があふれ、従来の民俗誌とは一線を画する。なお、その一方、町村史(民俗編)にも、まれではあるものの、生活の変化、現代化が記述される場合もある。^⑥

② 民俗学にとって都市とは

これまで、都市を対象とした研究は、様々な分野で蓄積されてきた。たとえば、都市地理学においては、人口、産業、土地利用、施設立地などを、主にマクロな視点で、都市空間、都市的地域を分析してきた。この分野では、実態の把握だけでなく、理論化を想定する。最近では、近代化の過程における都市空間の形成を、資本主義や権力との関係から解明しようとする研究が少なくない。^⑦ 地理学における都市研究の基本は、統計を駆使した、地域の量的把握である。古典的な代表例が、中心地論と呼ばれるものである。様々な規模の都市群が相互に補完関係を持ちながら、マクロな意味での地域を構成することを実証してきた。また、都市社会学では、流動性、匿名性、複合社会、貧富、ネットワークなどをキーワードに、都市社会の解明を目指してきた。社会学では、大都市圏というスケールから、町内会というスケールまで扱う。つまり、マクロな視点だけでなく、ミクロな視点でも調査研究を行っている。社会学における都市研究の基本は、一般理論の構築であり、抽象化である。^⑧

一方、都市民俗学では、都市化の民俗および都市独自の民俗を把握しようとして、いくつかの試みがなされてきた。まず、都市化の民俗とは、村

落から都市に変わりつつある地域での民俗変化である。村落社会の民俗事象が都市化に対応して、どのように変化しているかを検証する。次に、都市独自の民俗とは、極端に言えば都市起源の民俗、都市だからこそ生まれた生活文化である。柳田以降の民俗学が提唱する都鄙連続体の立場から言えば、都市独自の民俗は都市起源の民俗はないということになるが、実際のところ、都市独特の民俗としか呼べない現象もある。いずれにせよ、現在の民俗学では、都市研究はミクロな視点に特化している。以下、民俗学に限って、都市とは何かということを考えたい。

まず、都市の概念である。地理学や社会学の成果からも分かるように、都市は空間概念であり、社会概念である。箱や容器としての都市空間があり、中身としての都市社会がある。一方、民俗学では、人々の生活習慣や行動様式、価値観などを対象とするため、空間概念や社会概念だけでなく、文化概念として都市を把握することになる。ライフスタイルや生活意識をも含む議論となる。一面では、都市性も把握と言っても良からう。

次に、都市での伝承の在り方である。従来、都市民俗学では、伝承母体として、ムラに対するマチを想定した。町場とも呼ばれる、伝統的な地域共同体である。多くの都市民俗的な研究は、城下町や在郷町の旧市街でのマチに注目してきた。伝統的な町場でも、門前町、宿場町、港町の事例研究は、さほど多くない。かつて、倉石忠彦は団地の民俗を調査・研究して、この分野を開拓してきたが、新興市街地やニュータウンの都市民俗的な研究は依然として少ないと言わざるをえない⁹⁾。さらに、現代では、血縁、地縁だけでなく、会社や学校などを核とした社縁集団、趣味のサークルなど同好会的な集団を、伝承母体に想定する必要がある¹⁰⁾。むしろ、この場合、伝承のネットワークとして、世代間だけでなく、様々なバリエーションを認めることになる。伝承母体として血縁、地縁だけでなく、社縁や選択縁に注目するのである。たとえば、都市伝説と

して有名になった学校の怪談の場合も、先輩・後輩、同級生の中の伝承がポイントとなる。さらに言えば、都市の生活習慣や行動様式を見る場合、極端に言えば、個人にも視点を向ける必要がある。個性が集まって都市を作っているという考え方も否定できないからである。

先に、都市を量的に把握するという方法に触れたが、民俗学の本質は、量的把握ではなく、質的把握にあることを再確認したい。庶民の心意、心性の理解である。また、民俗調査報告としては、民俗社会を構成する要素を記録するが、本来の関心は、部分ではなく、総体としての生活文化の理解である。

以上のことを考えると、今後、民俗学の視点から都市を見る場合、文化概念としての都市、旧来の地域共同体を越えた都市の在り方、その質的把握に、力点を置く必要がある。特に、生活の変化を見逃さないという姿勢が、都市民俗、さらには現代民俗の把握には欠かせない。繰り返せば、都市の定義は立場や切り口により様々ではあるが、民俗学は、箱ではなく、中身に注目すべきである。都市を対象とする民俗学でも当たり前ながら、モノの生活文化だけでなく、ココロの生活文化を、その具休相から明らかにすべきである。

③ 都市民俗生活誌の可能性

以上のことを踏まえ、都市民俗生活誌の可能性について、拙い私見を列挙したい。

(1) 都市性の発見

従来の項目別調査では把握できない都市性を発見できる。場合によっては、地域独自の都市性を発見できる。都市的地域の調査では、たとえば「方言がない」というような事例がある。地域で使われる言葉が、標

表1 山形県内の都市民俗生活誌資料目録（一部）

※資料順不同

No.	調査施設	資料分類	書名	著者名	著者属性	出版社・発行所	発行年月日	総ページ数 掲載ページ	判形	内容要旨	その他特記事項	都市	地方
1	山形県立図書館 〒990-0041 山形市緑町1-2-36 023(631)2523	単行本	道程 一わが半生の記一	山澤進	会社社長 (昭和5年生)	雪国社、 山形市あこや町3-16-10 0236(22)4882 自費出版	平成2年11月30日	215 (1-32)	B6判	山形市を中心に事業を展開して きた著者の自分史。		山形	
2	"	単行本	山形いまむかし	斎藤利世	歯科医 (随筆家)	やまがた散歩社 山形市あこや町2-15-11 0236(31)2816 ¥980	昭和54年9月30日	232 (73-226)	B6判	著者の身の回りのこと、山形弁、 風俗時評などをテーマに書かれ た短文がまとめられている。		山形	
3	"	単行本	越えて来た道	池野政之助	農業ほか (明治35年生)	発行者＝著者 山形市千歳二丁目7-21 0236-81-0289 自費出版	昭和54年4月1日	208	A5判	山形市内出身の著者の自分史。	著者は郷土史に関心の深い人 物の様子で、地域の生活が丁寧 に記されている。	山形	
4	山形市立図書館 〒990-0035 山形市小荷駄町7- 12 023(624)0822	単行本	街の断章	八島信雄	元山形市役所 勤務	発行者＝著者 山形市双月新町4-11 0236(31)9374 自費出版	1991年4月6日	253 (9-120)	A5判	城下町山形のそれぞれの町をモ チーフにして綴った自分史。	文献を参考にした内容も多く記 載されているので、一時資料的 な性格は薄い。	山形	
5	"	単行本	やまがたに生きる (第37集)	(編集) 山形市教育委員会		山形市教育委員会 山形市旅館町2丁目3-25 非売品	平成9年10月1日	289 (163-197)	B6判	山形市民による文集。該当箇所 は郷土の今昔をテーマとしてい る。		山形	
6	山形県立図書館 〒990-0041 山形市緑町1-2-36 023(631)2523	(雑誌内) 随筆 ※文学同人誌	「幼少年代の暮らし」 『長井文学』	佐藤双石	不明	長井文学会 山形県長井市平山1112(新野方) 0238(84)7088 ¥500	1998年10月	140 (36-51)	A5判	戦前山形市内で幼少時代を送っ た著者が、当時の教育や街の様 子をふりかえる。		山形	
7	"	単行本	山形 街角の履歴書	田中邦太郎	文筆業 (大正5年生)	講談社 ¥1500(本体¥1456)	1993年12月3日	191	B6判	山形市内の町々の歴史や生活 を、自らの思い出もまじえて描 く。		山形	村山
8	"	単行本	山形桐紙と吉田家	(著者) 吉田吉助 (編集) 後藤嘉一	会社社長 (明治17年生)	吉田桐紙工業所 山形市幸町1番20号 自費出版	昭和43年11月3日	258 (3-46、214- 244)	A5判	戦前山形の特産だった桐紙製造 を創業した著者の回顧談。		山形	
9	"	記念誌	わが町の昭和誌 (町内会発足三十周年 記念)	小姓町三区町内会		(代表者)小姓町三区町内会三十 周年記念誌編集委員会編集委員 長(町内会長) 杉山繁雄 山形市諏訪町1-52 非売品	昭和62年5月24日	95 (10-49)	B5判	山形市小姓町の町民やかつて 住んでいた人々が町の思い出を 寄せる。	遊郭について書かれた戦前編が 特徴的な内容。	山形	
10	"	単行本	東北婆っば烈伝	(企画) 三田公美子 (執筆) 長田洋子ほか(該当箇 所は、佐々木はる)		(発行)北燈社 仙台市青葉区中央4丁目4-4-305 022(268)0170 (発売元)星書社 東京都文京区大塚3-21-10 03(3947)1021 本体1524円＋税	2000年3月20日	287 (115-128)	B6判	山形市内で美容室を営んできた 女性(大正2年生)へのインタ ビュー。	東北地方の女性事業家ら27人 へのインタビューをまとめた本。	山形	
11	"	単行本	ふるさと駄がし歳時 記	佐藤喜久子	元小学校教員 (昭和4年生)	発行者＝著者 新庄市宮内町4-6 自費出版	昭和58年1月25日	104 (6-80)	B5判	河北町谷地出身の著者が、駄菓 子をモチーフに子ども時代の思 い出を語る。		河北町	
12	"	単行本	聞き書き職人伝 51 人衆	松田國男	元中学校教員 日本民俗学会 会員	発行者＝著者 山形県西村山郡大江町左沢160番 地 0237(62)4318 ¥1800	1999年8月1日	355	A5判	河北町の職人への聞き書き。	河北町内全域を対象としている ので、ムラ・マチの区別はない が、中心の町場・谷地の職人も 収められている。	河北町	

準語に近いと言っているのである。旧鉾山町の栃木県足尾町の通洞地区や松原地区で調査をすると、人々は「この辺りでは方言を使わない」と言う。全国各地から鉾山労働者や商人が集まったため、自然と、方言が淘汰されたのだそうである。同様のことは、旧軍隊町の千葉県習志野市大久保地区でも、聞くことができた。やはり、各地から商人が集まったからだという。しかも、数世代に継承される事実である。従来、民俗調査の項目別調査では、「方言がない」という事実が記録されない。そもそも民俗調査の目的に合うのは、方言を発見する作業なので、このような事実は無視されるのである。だが、都市性を考える場合、この事実は無視できない。多種多様な人々が集まる場所が、都市だからである。これが、都市民俗生活誌的視角の利点である。

(2) 総体としての生活

都市民俗生活誌の理念は、生活の総体を眺めることにある。生活の構成要素を全体の中に位置付けることができ、日常の生活実感を確認できる。背景となる社会の文脈に即して、生活を理解する。この場合、参考となるのは、記述的な民俗誌を残した宮本常一の仕事であろう。宮本の作品は文学的で、客観性に欠けるとの批判があるが、地域の人々の生活実感に近づこうと試みた点で、参考になると私は考える^①。

(3) 生活の動態的把握

都市民俗生活誌では、生活文化の変化を前提にする。現代の都市生活を描くことから、当然である。年中行事を取り挙げる場合、たとえば、バレンタインデーやクリスマスなどの記録を無視することはできない。従来の民俗誌では、まったく無視される年中行事である。だが、現代生活では、かなり重要な行事である。正月やお盆を扱う場合も、その伝統性だけでなく、初詣や墓参りの変化を射程に入れる。また、かつて岩本

通弥が注目したように、圧倒的多数を含めるサラリーマンなど都市生活者の生活文化も重視すべきである^②。

(4) 外部からの視線

都市は、様々な人々が離合集散する場所である。したがって、都市民俗生活誌に描かれる主体として、都市の内部に暮らす人々に限るのは不十分である。外部からの視線を無視できない。たとえば、都市空間の中で最も都市的な場所のひとつは、盛り場であろう。盛り場を構成する主体として、そこで暮らし、あるいはそこで稼ぐ人々だけを想定するのは一面的である。盛り場では、来訪者によるにぎわいが不可欠である。したがって、来訪者の視線から盛り場を描いた資料も見逃せない。同様に、観光地、別荘地の都市民俗生活誌も成立する。観光地、別荘地の多くは、都市に分類できると私は考えるからである。サービスマンがこれらの場所で卓越するというだけでなく、地元の人々とともに来訪者の存在が不可欠だからである。都市社会の要件である匿名性や流動性に満ちている場所である。したがって、都市としての観光地、別荘地の記録にも目配りが必要である。

(5) ミクロな視点から見た都市

先に述べたように、民俗学の特徴、魅力は、鳥の視線ではなく、虫の視線である。ミクロな視点から、地域文化、生活文化を記述するのが、民俗学の基本だと私は考える。むろん、民俗的な文化論は、マクロな視点での整理であるが、ベースはミクロで地道な調査研究である。最近の多くの社会科学的地域研究では、グローバルとローカルという両方向からの分析が主流になりつつあるが、最終的に一般化、理論化に持ってゆく。都市研究では、たとえば、都市地理学者のD・ハーヴェイや都市社会学者のM・カステルなどの理論に基づき諸研究が散見されるが、

ローカルな事象は、結局、グローバルな政治・経済システムに絡み取られるという紋切り型のストーリーに終始し、画一的なストーリーに直接結び付かないローカルな事実の多くは無視される傾向がある。都市民俗生活誌を提唱したい理由のひとつは、民俗学の基本、ミクロな視点から都市生活を再確認したいのである。

(6) 多様な都市を確認

以上のように考えると、様々な都市生活の有り様を認めざるを得ない。極端に言えば、同じ都市を眺める場合でも、そこに関わる人が百人いれば、百様の都市があつて良いのである。むろん、共通点も多いと考えられるが、同時に相違点を重視すべきだと私は考える。これも、都市民俗生活誌という一次資料を重視し、それらを確認、検討したい理由である。

④ 問題点と課題

以上、都市民俗生活誌の可能性について、私見を述べてきた。民俗学だけでなく、地理学、社会学など都市研究において、再確認すべき資料群のセールスポイントである。ところが、上記の論理には問題点が多いことも自覚すべきである。

まず、都市的な生活文化、ライフスタイルに注目し、かつ都市を文化概念とすると、現代では、もはや都市に對峙すべき「村落」はないのではないかという問題である。生活にまったく変化がない村落は存在せず、現代的な生活をまったく営まない村落はない。たとえば、富山県山田村では、IT革命が進み、山奥に住むお年寄りさえ、パソコンを使って健康管理をしているという。むろん、モータリゼーションの普及や日常生活の電化は当然の前提である。あらゆる生活文化は現代化、都市化し

つつあると言わざるをえない。しかし、最近、注目されている環境民俗学の成果を見ても分かるように、村落生活には、伝統的な要素、伝承される要素が必ず存在する。生活のプロセスやリズムは「村落」としか呼べない部分が少なくない。ただし、逆に言えば、人工環境に對応した都市の環境民俗学も成立する可能性がある。高層ビルの民俗、地下街の民俗も成立しうる。

次に、血縁や地縁を軽視し、極端には個人に注目する民俗誌は、もはや地域を描いていないのではないかという問題である。個人の生活記録は、特殊な人物のそれであつて、地域を代表する作品ではないかもしれない。だが、よくよく考えてみれば、多種多様な人々が集まる場所こそが都市であり、彼らを一くくりにして都市生活を把握しようとする自体に無理がある。つまり、都市の理解は、従来の地域民俗の枠組みでは、もはや困難である。伝承母体として地域共同体のみを想定することはできない。個人の民俗誌、生活誌ということが極端すぎると言うならば、コミュニティではなく、ネットワークの民俗誌、生活誌を提案しても良い。たとえば、単身赴任者の生活記録がある¹³⁾。地域に暮らしながらも、地域とは距離を置きながら生活する人々の作品である。現代の都市生活で、同じような生活形態はますます増えるであろう。今後の民俗学は、彼らの生活を無視できない。

さらに、都市民俗生活誌という言葉で、資料群を一括したが、資料の性格が多様すぎるという問題である。資料としては、自分史あり、町内会誌あり、探訪記あり、自治体史民俗編ありとバラエティに富み過ぎる。作品のスタイルも、日記あり、聞き書きあり、エッセイあり、である。執筆者も、そこで暮らす生活者あり、対象から一步距離を置く郷土史家あり、外部の学者、エッセイストありである。まずは、全国規模の網羅的な資料確認を目指しているが、資料の整理・分類、場合によっては取捨選択が求められる。この問題は、次のステップとして課題としたい。

いずれにせよ、都市生活の具体相を眺めながら、そこから都市性を発見、提示し、都市人の様々な心性を探る試みが続けたい。無理に急いで抽象化することは、かえって民俗学の魅力を消し去るのではないだろうか。

以上、不勉強ながら、私見を開陳してみた。誤解や考え違いが多く含まれる試論であるので、ご批判をお待ちしている。

〔付記〕

小論は、平成九〜十四年度国立歴史民俗博物館基幹研究「日本における都市生活史の研究：都市の地域特性の形成と展開過程」（研究代表者：吉田伸之東京大学教授）の成果の一部である。本研究には、平成十二・十三年度科研費「伝統的地方都市の地域特性とその変容に関する比較研究」（基盤研究（A）（一）、研究代表者：上野和男国立歴史民俗博物館教授）、「都市民俗生活誌データベース作成のための基礎研究」（基盤研究（C）（二）、研究代表者：内田忠賢）の一部、平成十一年度福武学術財団研究助成「都市民俗生活誌データベース作成のための基礎研究」（研究代表者：内田忠賢）の一部を使用した。また、小論の概要は、日本民俗学会第五三回年会（平成十三年十月、帝塚山大学）で発表した。

註

- (1) 倉石忠彦「民俗学における都市の概念」国学院雑誌第八五卷三号、一九八四年。同「マチ・町・都市」国学院雑誌第九四卷一―一、一九九三年。小林忠雄「都市民俗学：都市のフォークソサエティ」名著出版、一九九〇年。内田忠賢「ムラの中のマチ」森岡清志編『講座社会変動第三巻：都市化とパートナーシップ』ミネルヴァ書房（印刷中）。同「村落の中の都市」石原潤編『農村空間の研究』（下巻）大明堂、二〇〇三年。
- (2) 有末賢「都市民俗学と都市文化」都市民俗論集（都市民俗を考える会）第五号、二〇〇一年。なお、初出は『日本都市民俗生活誌集成第四巻（編集のしおり）』（一九九八年刊行予定、三一書房）であるが、本集成および「編集のしおり」は、校正が終了していたものの、出版社の都合により刊行が中止された。

- (3) 内田忠賢「都市民俗生活誌データベース作成のための基礎研究」福武学術財団平成十二年度年報、二〇〇一年。
- (4) 金沢民俗をさぐる会「都市の民俗 金沢」国書刊行会、一九八四年。
- (5) 阿南透「都市的生活様式の浸透過程」『宮古市史・民俗編』（宮古市）一九九三年。
- (6) 檀紙村誌研究会「檀紙村誌」檀紙村誌編集委員会（香川県高松市）、一九八六年には、都市的な生活様式がムラに浸透する様子が記録され、興味深い。
- (7) Harvey, D. 1973 Social Justice and the city. Edward Arnold (London) (D・ハーヴェイ「都市と社会的不平等」竹内啓一・松本正美訳、日本ブリタニカ、一九八〇年）が先駆的研究である。
- (8) 有末賢「現代大都市の重層構造：都市化社会における伝統と変容」ミネルヴァ書房、一九九九年、では、都市社会学と都市民俗学をバランス良く目配りしている。
- (9) 倉石忠彦「都市民俗論序説」雄山閣出版、一九九〇年。
- (10) 内田忠賢「都市の新しい祭り」と民俗学：高知「よさこい祭り」を手掛かりに『日本民俗学』第二三〇号、一九九九年。
- (11) 宮本による民俗誌は膨大（未来社刊行の著作集参照）であるため、引用することを省略するが、香月洋一郎『山に棲む：民俗誌序章』未来社、一九九五年、は、宮本の民俗誌の思想を見事に引き継いだ作品である。
- (12) 岩本通弥「都市における民衆生活誌序説：サラリーマンの民俗学」の可能性『史誌』（大田区史編纂委員会）第八号、一九七七年。
- (13) 木本孝『単身赴任TOKYO日記』無明舎出版、一九九七年。
- (14) 内田忠賢「経験と記憶：民俗学への問題提起」『講座日本の民俗学第二巻：身体と心性の民俗』雄山閣出版、一九九八年。なお、小論の問題意識を生かして、『日本都市民俗生活誌（全三巻）』（明石書店、第一回配本済）『都市民俗論集（全五巻）』（岩田書院刊行予定）の二シリーズを、倉石忠彦（国学院大学教授）、小林忠雄（東京家政学院大学教授）、有末賢（慶応義塾大学教授）の三氏と編集集中である。

（お茶の水女子大学大学院人間文化研究科、
国立歴史民俗博物館共同研究員）

（二〇〇二年二月十三日受理、二〇〇二年十月十一日審査終了）

The Proposal of Folk-Lifography on Urban Society

UCHIDA Tadayoshi

Many monographs on folk society in Japan had been described and researched. But, monographs on urban society weren't researched yet in folklore-studies. So, I'm now in inquiry about them, all over the urban areas in Japan. In it's proses, through many urban life records, I want to discuss on urban societies, urban areas and urbanity again. In this essey, I insisit on some next strong points about "Folk-Lifography on urban society".

- 1) Dicoverly of urbanity.
- 2) Synthesis on urban life.
- 3) Movement of urban society.
- 4) Stranger in urban society.
- 5) Point of detailed view to urban life.
- 6) Various types of urbanity.